

■発行人／蓮容 健

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016  
名古屋市中区橘二丁目8番55号  
TEL (052) 323-3686  
FAX (052) 332-0900



研究生第15期生は、教区・別院慶讃法要が執り行われる  
2027年度まで3年間学ぶ

「令和六年能登半島地震」の発災から二年が経過した。お正月のおめでたい空気が漂う中、あの日の辛い記憶と、今なお今後の生活に見通しが立たない不安を抱えておられる方々が大勢いる。

能登といえば、東海地方と並んで真宗寺院の多い地域である。寺院関係の仲間の話では、能登地域のほとんどの寺院が被災し、特に奥能登では壊滅的な被害を被っており、再建・修

## 不安に立つ

立つ！  
いのちの大地に  
聞く！  
いのちの叫びを

真実の学びから、  
今を生きる「人間」としての  
責任を明らかにし、  
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・公開講座  
釈尊の教説に見られる業 ②・③  
をめぐると言説
- ・公開講座  
「満蒙開拓」の史実から ④・⑤  
学ぶもの
- ・研究報告  
聞法とグリーンフェア ⑥
- ・研修報告  
研究生第15期生始動 ⑦
- ・仏教図書館
- ・INFORMATION ⑧

### 教化センター主幹就任のお知らせ

二〇二五（令和七）年九月一日付で、蓮容健氏（第八組 蓮容寺住職）が教化センター主幹に就任しました。



蓮容 健 主幹

復の目的が立たないのと言うまでもなく、寺院の解散を考えておられる住職も多いという。もともとの過疎化に加えてのこの度の被災である。そもそも寺院を支えるご門徒方が地域におられないのである。

今、現に苦境に立たされているご寺院の問題は、近い将来の自坊の行く末についても問題を投げかける。過疎化の深刻さについては比べようもなく恵まれた状況にあるものの、ここ数年で進む少子化と独居老人世帯の増加は、私の預かっている自坊の周辺でも肌で感じている。もしこの地域で大震災が起きたらどうなるのか。そうではなくても地域共同体の変容が進む中で、どうしたものかため息ばかりについている自分がいる。

NHKの朝の連続テレビ『ばけけ』の主題歌「笑ったり転んだり」（ハンバートハンバート 作詞・作曲・佐藤良成）の歌詞に共感してしまふ。

日に日に世界が悪くなる  
気のせいかな そうじゃない  
そんなじゃダメだと焦ったり  
生活しなきゃと坐ったり

寺院を取り巻く状況が悪くなる。このままではダメだと焦るものの、具体的な一歩が踏み出せない。とりあえず今できることを精一杯するしかない、居直ってみても漠然とした不安は拭えない。

教区内には、新たな様々な試みをしていて寺院がある一方で、焦りはあるものの何をしたいかわからない方もおられることだろう。そんな方々が出会い、共に学び考えることができる場所。時には愚痴を言い、不安な気持ちを口にできる場所。また時には、世代・職種を超えた他者との出会いによって刺激を受け、やってみようかと思える場所。そんな教化センターになることを願う。

教区・別院では、二〇二七年度に宗祖親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要を厳修することが決まった。今は、その基本計画を推進するための協議がはじまっている。教区が掲げる「不安に立つ」を憶念しつつ、真摯に教えに向かい、不安を抱える者が集い、共に先祖の教えを確かめる場所としての教化センターを護持相続していきたい。

ちなみに、主題歌は、  
落ち込まないで 諦めないで  
君のとなり歩きましょうか  
今夜も散歩しましょうか

と、締めくくられている。ドラマの内容からしてこれは、夫婦のことなんだろうな。と思いつつ、私は「あみださま」が一緒に歩いてくれているんだろうな。などと、勝手に励まされている。皆様の叱咤激励をいただけたら幸甚に存じます。

（主幹 蓮容 健）

公開講座  
2025年6月13日

特別講座 抄録

釈尊の教説に見られる  
業をめぐる言説

箕浦 暁雄氏（大谷大学教授）



まず初めに業についてこのように考えるということ、ある意味では結論として申してみます。第一に仏教における業は「行為」を意味する言葉です。仏教では身体行為や言葉によって外側に発現されるものではなくて、心で思うことをも行為の範疇として業と呼びます。第二に仏教における業をめぐる教説は「仏道を歩む姿勢」を問題にしていると捉えておくべきです。第三に思想の問題としては、業は「希望を語るもの」でなければならぬと考えています。この三点を念頭に置いてお話しします。

## 初期經典に説かれる業の教説

『小業分別經』というパーリ語で書かれた傳承されてきた初期仏教經典を確認してみます。この經典では、「劣性・優性」「短命の者・長命の者」「貧困の者・富裕の者」など人間における区別が業（行為）の結果としてあるのだと語られています。

青年よ、衆生たちは、業を自己とし、業を相続者とし、業を胎とし、業を親族とし、業を抛り所とするものである。業が、衆生たちを、すなわち劣性と優性に区別する。

『小業分別經』(Majjhima-nikāya 99, PTS 版 vol. 3)

さらには、殺生を行った者は短命になる、殺生を離れたものは長命の者になるなどと語られています。この語りをどのように受けとめていったらよいのでしょうか。時に私たちは、地位や名誉や財産などを獲得して成り立っている自らの境遇を喜びます。また、獲得してきたものが老病死によって奪い去られることは、悲しみや苦しみになっていきます。このように今現在の境遇を喜んだり悲しんだりすることがあるわけですね。その意味で私たちは業に縛られています。こうした經典には、短命の者や長命の者がある、貧困の者や富裕な者があるなどと、これでもかと言わんばかりにいくつもの例が挙げられています。私たちが被っている不条理を前にして為す術がなく、各々の境遇において仏道を成就していくような歩みが始まらないかのようにあります。しかし、自由意志と両立しない強い決定論(hard determinism)が唱えられているわけではないのです。この經典で挙げられる事例は、執着によってその境遇における業に各々が結びつけられている状況を示しているのと読み解かなければならないでしょう。衆生が限りなく様々な境遇に生まれることを示すために語られています。業因果のなかにいるということからは、いかようにも境遇を受け得ることだからです。まずもってそれを受けとめる

心が準備されないかぎり、釈尊の教説は教説たり得ないのです。そして、この教説には仏道を成就していくような業（行為）によってこそ、執着なき者へと転換していくことが含意されていると理解してよいでしょう。釈尊の教説を聞いた青年は、釈尊が「覆われたものの覆いを除くように」「迷った者に道を示すように」「眼ある者は形を見るであらうと暗闇に灯火を掲げるように」法を説いてくださったと喜んでいきます。苦悩を引き起こすような業（行為）をなす者と、苦悩を超えていくような業（行為）をなす者とが対照的に語られているということです。

## 生まれではなく業（行為）によってブラーフマナになる

『ヴァーセッタ經』もまた、パーリ語で書かれて今日まで傳承されてきた初期經典です。冒頭でブラーフマナの青年ヴァーセッタとバラドヴァージャとの間で「どのようにしてブラーフマナになるのか」「生まれによってか、業によってか」という議論が起ったと言います。そこでこの二人の青年は釈尊に見解を尋ねに行くことになり、釈尊が説いたことが順に語られています。まず初めに、草木には生まれからくる区別(āpāda)のしるしがあると語られています。虫や四つ足の動物や蛇や魚や鳥には生まれのしるしがあるのだと語られています。一方、人間には生まれからくる区別のしるしはないのだと語っています。髪、頭、耳、目、口、鼻、唇、眉毛にもどこにも生まれからくる区別のしるしがないと言います。そして、今度は、人間

における差異は名称によるのだと言います。

人間のなかで、牛を飼って生活するものはみな、彼は農夫であって、ブラーフマナではないと、ヴァーセッタよ、このように知るがよい。(六一二偈)

人間のなかで、種々の技能で生活するものはみな、彼は職人であって、ブラーフマナではないと、このように知るがよい。(六一三偈)

『ヴァーセッタ經』(『改訂大乗の仏道資料編』参照 Suttapitaka 39, PTS版)

人間には本来は生まれからくる区別はないにもかかわらず、ブラーフマナだとかクシャトリアやというように相違が生じてしまっていることになるんだと言っています。ここでは、名称によって呼ばれることで区別されるような差異が世間にはあると例示されています。こうした記述に基づけば、例えば、社会的差別を受けて苦しんでいる人を卑しい人だとか醜い人などと呼ぶ理由は本来何もないという姿勢を教説は持っているわけです。私たちが自らの尺度で生みだしたものにすぎないということです。続いて、例えば次のように、どのような者がブラーフマナであるのかを示す文言がいくつも記されています。

まさしくここで、自らの苦の消滅を知り、重荷をおろし、繫縛を離れた者、その人を私はブラーフマナと言う。(六一六偈)

深い智慧あり、聡明で、道と非道をよく知り、最高の目的に達した者、その人を私はブラーフマナと言う。(六二七偈)

(前掲書参照)

「ブラーフマナ」とは、本来はヴァルナ体制(古代インドの身分制)における最高の者を指して使う言葉です。しかしこの箇所ではブラーフマナという言葉が持つ伝統的な意味を転換して、「仏道を成就した者」の意味で使われています。初期經典のなかではこのブラーフマナという言葉が、仏道における求道者や、仏道を達成した者すなわち仏陀の意味で用いられている場合がいくらかも見つけられます。仏教の側から、こういう者こそが真のブラーフマナだと言っているということになります。そして、「ブラーフマナ」「クシャトリア」、あるいは、このブラーフマナの青年の名前である「ヴァーセッタ」などは、世間の慣習からくる呼び名にすぎないのだと言います。

というのは、これは世間における名称であって、名や姓はつけられたものだからである。世間の認識によって生じたものであり、その時ごとにつけられたものである。(六四八偈)

知らないものたちに、謬見が長い間にわたってひそんでいる。知らないものたちは、我々に言う。生まれによってブラーフマナになるのだと。

(六四九偈)

(前掲書参照)

呼び名にすぎないことに気が付いていない者たちには、誤った見解(謬見)が

潜んでいるのだというわけです。だから、気が付いていない者たちは、呼び名にすぎないにもかかわらず「生まれによってブラーフマナになるのだ」と語ってしまっているのだということです。このことを踏まえて次の言葉が提示されます。

生まれによってブラーフマナになるのではなく、生まれによってブラーフマナではないものになるのではない。業(行為)によってブラーフマナになり、業(行為)によってブラーフマナではないものになる。(六五〇偈)

(前掲書参照)

この文言をご存じの方がおられましょう。特に社会的な差別の問題が語られる時に、よく引き合いに出される經典の文言です。この前後に書いてあることを注意して見ながら、読む必要があると思います。続いて「このように、知者たちは、この業(行為)をありのままに見る」と言われます。誤った見解が潜んでいて如実に知らない者とは対象的に、知者たちは業をありのままに如実に見ると説かれているわけです。これはもちろん仏陀の眼差しを語るものです。そして、私たちが業によって繋ぎとめられているからこそ、最も優れた業(行為)、すなわち仏道を成就していくような業(行為)によってこそ、最も優れた生存がありえるということを語るのです。ヴァルナ体制そのものを真正面から否定するような語り方ではないのですが、いかなる者も仏道を歩んでいけることを語るこのような眼差しが、初期の仏陀観を伝える教説のなかに確かに見出されることを、まずきちんと

と確かめておく必要があると思います。

## どのような者でも 仏道を歩むことができる

仏教はある伝統によつては「自覚道」と語られてきました。「自覚道」とは後代になって急に言われ出したのではなくて、初期の仏陀観を語ってきた仏教徒たちがずっと秘めていた問題意識であると思います。ひとつには、これはまさに業論の主題を重く受けとめてきたからであると考えています。私自身はお寺に生まれ、今そのお寺を預かっております。お寺にいますと大切な方を亡くされた喪失の悲しみに接することがあります。なかにはどうにもならない苦しみを抱えることになつてしまった方もおられます。「なんで私だけがこんな不条理を背負わなければならないのか」というような、何とも言えないやりきれない思いを抱えておられることがあるわけです。その一方で、喪失の苦しみを抱えながらも「生まれてきてくれてこまで生きてくれてよかったなあ」という喜びを心の底から吐露されるお姿にも出あつてきました。本当に心の底からこの世界に生まれてきたことを喜べるのはどのような生き方であるのか。そういった姿に接していると、目の前でダイレクトに問われてくるような感じがします。石原吉郎というシベリア抑留体験を持つ詩人がこのような言葉を残しています。「自らを凝視する勇氣のないところからついにいかなる希望も湧いては来ない」「自分の現実の姿を承認することなしには、私にとってはどんなささやかな前進もありえないだろう」(石原吉郎『望

郷と海』筑摩書房、二〇〇二年)。こうした発言は、業論の主題を考える上でも示唆的です。

業をめぐる教説には、まずは苦悩の存在であることを立ち止まって認識してみるといった視点があります。同時に、苦悩を超えて歩み出そうとする姿勢を持つという方向へと向かわせるような気づきを与えてくれる釈尊の眼差しが示されています。初期經典の語りを見る限り、不条理な境遇をただあきらめるしかないと言っているわけではないのです。そればかりか、私たち人間が抱えているあらゆる状況すべてを一つの業因果として全体的に説明できると言っているわけではないのです。つまり、業をめぐる言説は、世界の現象を説明するための因果関係の一般原則としての語りではありません。仏道を歩む者に視点がおかれている語りのなかで用いられているということです。だからこそ、業をめぐる言説は希望を語るものでなければならぬと考えております。特に今回強調したかったのは、どのような者でも自分の生涯を歩み、仏道を歩んでいくことができるという眼差しを仏教は確かに持っているということです。古代インドの仏教徒たちは、そういったことを大事にして經典を紡ぎ出し、伝授してきたのだと思います。そして、チベットで展開した仏教も、中央アジア、あるいは東アジア地域で展開した仏教も、そしてこの日本で展開してきた仏教も、親鸞聖人も、その眼差しを掴み取りながら来たのではないのでしょうか。そのような見通しを持って学んでみるということは、あながち間違いではないと思っています。



公開講座  
2025年3月19日

平和展特別学習会 抄録

## 「満蒙開拓」の史実から学ぶもの

寺沢 秀文氏  
(満蒙開拓平和記念館館長)

## なぜ開拓団は渡ったのか

開拓団がかつての「満州」に渡っていった理由については、大きく分けて三つに整理できます。

第一に、日本の支配力強化のためです。「満州国」は一応独立国とはいえ、実際には日本が支配力を強めていく必要があります。そこに定住する日本人人口を増やすことが有効だと考えられました。第二に、日本国内の「人口を減らす」という要素がありました。当時、特に農村部は世界大恐慌の影響で貧困にあえぎ、子沢山の農家が多かったため、「満州」へ行けば広い農地が手に入るとの誘因があり、国内の困窮対策としての側面もありました。そして第三に、これがかなり大きな理由を占めるのですが、軍事的な目的です。開拓団は戦争の末期に入っていた開拓団ほど北の方、「ソ満国境」の危険な方へと送り込まれていきます。ソ連に対する人間の防波堤、人間の盾として送り込まれていきました。

万人の開拓団のうち、約八万人が現地で亡くなるか、残留孤児・婦人として残されるという大きな犠牲を出しました。



旧「満州国」地図

## 開拓団の入植と宗教の関与

開拓団が入植した多くの場合、山林原野を開拓したのではなく、元々そこに住んでいた中国人の家屋や畑を非常に安い値段で買い上げて入っていたため、現地の人々は日本人を内心では恨んでいた。このことが、後にソ連侵攻時などに開拓村が襲撃される一因となります。現地の中国の方と話をしていると、あんなのは開拓団じゃなくて「侵略移民団」だとはっきり言われたことも何回かあります。私たちの記念館では、日本人側の被害と、現地の人々に対する加害という両面にきちんと向き合うことを一番大切な柱としています。

開拓団は一九三二（昭和七）年を第一次として、一番最後の開拓団は終戦の年に送り込まれております。送り出した時期によって組織の分類の仕方が異なっており、第一次の「弥栄村開拓団」や第二次の「千振開拓団」など、初期の開拓団は「試験移民」や「武装移民」と呼ばれ、元軍隊経験者を主体としていました。

この「弥栄村開拓団」は多くの犠牲者



武装移民

「満州国」は理想の国を作るといふスローガン「五族協和」（漢民族、満州族、朝鮮族、モンゴル

かつて日本は、現在の中国東北地方に「満州国」という国を作りました。一九三二（昭和七）年～一九四五（昭和二十）年の間です。ここに日本全国から約二十七万人という「満蒙開拓団」が渡っていくことになります。

私は全国で唯一の「満蒙開拓」に関する記念館の館長を仰せつかっております。一民間人であり、歴史の研究者ではございませんが、元「満蒙開拓団」員であった両親を持ち、終戦の冬に兄を現地で亡くしています。二世としてこれまでに三十回以上現地に足を運び、多くの方々からお話を聞いてまいりました。本日はその「満蒙開拓」の歴史についてお話をさせていただきます。

族、日本人）を掲げましたが、実態は日本が支配する傀儡国家であり、中国では「偽満」（偽の「満州国」と呼ばれ、民族差別や植民地的な要素を伴っていました。この「満州国」には百七十万とも二百万とも言われる日本人が入っていました。開拓団は主に農業移民として「満州」へ渡り、そのうち、約七割が家族で渡った「一般開拓団」、約三割が満十四歳から十八歳の少年を集めた「満蒙開拓青少年義勇軍」でした。当館がある長野県は、開拓団の人数が約三万七千人と他の地域に比べ圧倒的に多いのが特徴で、これは山が多く平地が少ないという地理的要因に加え、当時の長野県の地域リーダー層に「満州開拓」推進論者が多かったからであると分析されています。

愛知県からは約二千三百人余りと比較的少ない数でしたが、それは愛知県が軍需関係の工場や軍事施設が大変多かった地域で、軍事労働者の需要が大変たくさんあったからです。

「青少年義勇軍」は国から割り当てがあり、愛知県の場合でも教育界が率先して送り出してきました。その結果、愛知県は七割近くが「青少年義勇軍」でした。

「満蒙開拓」は当時の国策として強力に推進され、一九三六（昭和十一年）年には二十年間で百万戸、五百万人を送り込む計画まで立てられました。国や地方自治体、教育界、各種団体が送出に関与し、貧しい農村には経済的な援助と引き換えに分村・分郷開拓団の送出が促されました。この「満州」への移民は、南米などへの移民とは異なり、国策としての軍事的な目的を加えて、現地の人々にも多大な加害を与える形での「開拓」であったことを理解しなくてはなりません。約二十七



青少年義勇軍募集ポスター

を出したのですが、その「弥栄村」には「弥栄布教所」というお寺が建立されました。真宗大谷派本龍寺のご住職である本多賢純さんが「弥栄村」に入り建立したのです。現在、本龍寺境内（東京都台東区）には「弥栄村」の村民殉難者の碑という慰霊碑があります。

当時「満州」には仏教をはじめ宗教界からも色々な関与がありました。東本願寺や西本願寺など多くの宗派が、布教のため、あるいは開拓団そのものとして入っていました。他にも、賀川豊彦らが中心となって送り込んだキリスト村開拓団、天理村開拓団（天理教）、佛立開拓団（本門佛立宗）といった宗教団体による開拓団も存在しました。

## 敗戦と置き去り

戦争末期になると、開拓団からは十八歳から四十五歳の男性が「根こそぎ動員」で召集されます。その間に一九四五（昭和二十）年八月九日、中立条約を結んでいたはずのソ連が突然「満州」へ攻め込んできます。開拓団の人々は、日本軍（関東軍）が守ってくれると信じていましたが、日本軍はソ連軍の追撃を避けるため、

開拓団に知らせずに「放棄地域」である前線から南の「作戦地域」へと南下してしまいました。日本軍は戦略上の理由とは言うんですけども、南下をしてみたい。その南下をする時に、敵に知られてしまうからということとで一切開拓団には知らせないわけなんです。知らせないどころか、敵の追撃、追いかけてくるのを防ぐために、松花江とか大きな川にかかる鉄橋を爆破し、鉄道を爆破して、南へと南下して行ってしまうんですね。

置き去りにされた開拓団からは、逃避行や集団自決で多くの犠牲者が出ます。残留孤児・残留婦人の多くが開拓団の子女であつたという事実は、軍隊に置き去りにされた前線の開拓団に女性、子ども、老人ばかりが残されていたという実態を物語ります。また、私の父のように兵隊として動員された多くがシベリアに抑留されました。

終戦時、日本政府は在外邦人に、「居留民（在外邦人、外国にいる日本人）は出来得る限り定着の方針を執る」。つまり現地にとどまれ、と言っているわけですね。そして一ヶ月後日本軍参謀名で出された文書には、「満洲」に土着する者（「満洲」や朝鮮にとどまる者、今後住もうとする者）は日本国籍を離るるも支障なきものとす」と、平たく言えば日本国籍を捨ててもいいから現地にとどまって生き延びよと言っているように受けとめることもできるわけです。このため、残留孤児の皆さんは「守ってくれると思っていた日本軍はいなくなってしまった。日本に帰らなかったのに中国に置いておかれた。よ

うやく日本に帰ってきてても日本の人々は私たちのことを異邦人のような目で見た」と言つて、国から三度捨てられたということを訴えられているのです。

## 帰国後の苦難と平和への誓い

「在満邦人」の帰国が本格化したのは終戦翌年の一九四六（昭和二十一年）五月以降でした。日本に帰っても行く場所のない引揚者は、再び故郷を離れて国内の開拓地に入植し、荒地の開墾から新たな生活を始めました。私の父もシベリア抑留から帰還し、母は夫の帰りを待ちながら長野の開拓地に入植していました。父は、戦後の開墾の苦労を通して、「かつて自分たちの大切な農地や畑を日本人によつて奪われてしまった、現地の中国の農民たちの悲しさや悔しさがよくわかった」、「あれは日本の間違いであつた」と語りました。これが、私が記念館の活動に取り組む原点です。

残留孤児の多くは、苦難の末、日中国交回復後の長い年月を経てようやく帰国できましたが、その命を救い、育ててくれたのは中国人の養父母でした。私たちは日本人はこの事実を忘れてはいけません。中国に残されている日本人の公墓は、「方正日本人公墓」たつた一つのみしか許されていないことも知っていただきたいです。この「満蒙開拓」という歴史は、日本人として決して忘れてはならない、二度と繰り返してはならない歴史です。学校などで語られることが少なかったのは、ある意味、多くの人々にとって不都合な歴史であつたからかもしれません。しかし、「不都合な事実」に目を瞑るものは再び同じ過ちを繰り返す」のが歴史です。

現在の長野県下伊那郡の阿南町、当時の大下条村の村長であつた佐々木忠綱さんは村から開拓団を出すことに最後まで抵抗しました。国策に対し「おかしいものはおかしい」と反旗を翻した方がいらつしたということにも私たちは学ばなければならぬと改めて思うわけでございます。

あるアジアの青年から「やっぱり日本人は信用できない。それはかつて日本が私たちの国を侵略したからではなくて、今の日本人がかつて日本が何をしていたということを知らうとしないからだ」と言われた時には、正直頭をガンと打たれる思いがしました。やはり私たちはきちんと子どもたちに伝えていかななくてはなりません。私たちがこの歴史を学ぶのは、新たな憎しみや対立を生むためではなく、二度と悲しい犠牲者を出さないためです。「満蒙の記憶 私も受け継ぐ」ということで、記念館では地元の高校生がボランティアとして展示ガイドに取り組む活動もしています。

私たちがこの歴史を語り継ぐことは、明日の平和のための「平和の種まき」であると信じています。若い世代には、近現代史をしっかり学び、かつて日本がアジアの中でどう過ごしたかを理解してほしいと願っています。

講義の模様を当センターYouTubeチャンネルで公開しています。





## 研究報告

グリーンフケアと真宗教化③  
聞法とグリーンフケア

吉田 暁正

## 学びから方向が見えてくる

グリーンフケアという動きは、喪失による悲嘆についての研究とともに進められてきた。悲しみを抱える中に、どのような姿があり、どのようなプロセスをたどりながら生きていくのかということ、具体的に臨床の現場から人々の声を聞き、そこから検証と考察を重ね、グリーンフのさまざまな姿が明らかにされてきた。このようなグリーンフケアの研究と実践において課題とされてきたことは、仏教の課題と通じるものであろう。法として伝えられてきたことは、人として生まれたゆえに抱える苦悩に就いて説かれたものである。仏教もグリーンフケアも、どちらも人間を生きた課題と向き合ってきた道であらう。その学びの中に、自らが問われ、ともにあることが問われ、そこに見えてきた課題をたずねてきた歩みがある。その課題を学び、確かめていくことによって、お寺として、僧侶として、人として歩んでいく方向が見えてくるのではないかと思う。

## 生老病死に関わるグリーンフ

仏教の課題は苦しみからの解放である。その苦しみの原因は生老病死の四苦といわれる。さらに、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦を加えて八苦ともいわれる。人として生まれたゆえに、老病死

を苦しみとして生きる。また、関係を生きるがゆえに生まれる苦しみがある。

生老病死はいのちの事実であり、誰も逃れることはできない。しかし、それが事実であると理解しても、実際に自分の身に現実の姿として突きつけられた時、私たちはとまどい、思うようにならないことに苦しむことになる。それは自分の身だけでなく、関係に生きるがゆえに、他者の姿に出あう中で生じる苦悩もある。

「老」は若さを失うこと、「病」は健康を失うこと、「死」は存在を失うことである。そこには喪失による反応や影響が生じ、悲しみや苦しみを抱えることになる。そこにグリーンフの課題がある。このような人間の根本的な課題に対して、釈尊は丁寧な法を説かれた。一人ひとりの苦悩の姿に就いて、言葉を選びつつ、その人が歩み出していけるように。

実際に、老病死の問題については、釈尊自身が晩年の旅において、自らの姿を通して仏弟子たちに法を説かれた様子が、『大般涅槃經』という原始經典に伝えられている。特に、釈尊の説法の旅の侍者であった阿難の姿には、喪失の現実揺れ動くグリーンフの姿が丁寧に描かれている。

## 阿難のグリーンフ

阿難は、釈尊入滅までの二十五年間、誰よりも釈尊のそばで説法を聞いた多聞第一といわれた仏弟子である。その阿難が、

最後の旅の中で、釈尊が老いていく姿、病に伏す姿を目の当たりにし、いよいよ入滅が近いという現実を前に、大きな悲嘆に苦しむことになった。

釈尊は、「諸行無常」を繰り返し説いてきた。あらゆるものは止まることなく移り変わる。形あるものは滅びゆくものである。生まれてきたいのちは必ず死すべきいのちである。おそらく阿難が釈尊のそばで何度も聞いてきた教えであらう。しかし、目の前の釈尊の老病死という現実を突きつけられた時、大切な存在を失ってしまう不安や恐れから、その事実を認められず、大きな悲嘆を抱えることになった。

常に釈尊のそばで、さまざまな課題についてたずねながら聞法してきた阿難にとって、その存在を失うことは、自分よりどころと歩む道を失うことと同じであった。嘆き悲しむ阿難に対して、釈尊は、諸行無常であることを繰り返し丁寧に伝えながら、これまで仕えてくれたことに感謝し、これからも努め励んで修行することを促し、やがて覚りに至るであろうことを告げられた。

諸行無常であると何度も聞いてきた阿難であったが、釈尊を失うという現実はいかに大きく、その教えに領くことができない。大切な存在の喪失は、それほど大きな影響を与える。その人間の苦悩にこそ説かれたのが仏法ではないか。自分の思うように法を聞くのではなく、その自我心を破り、自分の根にある問いに法がはたらく。それが真に法に出遇うということではないだろうか。

釈尊は、阿難の悲嘆の姿に就いて、時には真つ直ぐに教法を伝え、時にはその悲しみを受けとめながら励まし、阿難自身が仏道を歩んでいく方向と道を示され

た。それは次のような言葉で伝えられている。

この世で自らを島とし、自らをたよりとして、他人をたよりとせず、法を島とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ<sup>1</sup>。

「自灯明法灯明」として表現されることもある。他人に依存せず、自分自身が問いを丁寧に確かめていくこと。その問いは法をよりどころとしてたずねていくこと。釈尊は仏道として大切な姿を示された。そして、いよいよ入滅を迎えた時、最後に説かれたのが次の言葉である。

さあ、修行僧たちよ。お前たちに告げよう、「もろもろの事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完成なさい」と<sup>2</sup>。

最後の説法も諸行無常であることを伝えられた。そして「怠ることなく」という言葉は、繰り返し法をよりどころとしてたずね続けていくことを促している。

生老病死に関わるグリーンフは、誰もが経験し、歩む道を見つかけようと迷い、悩むことがある。分かつていてもその通りには生きられないことに苦しむのはおかしなことではない。だからこそ、その自分を受けとめてくれる場とたずねていく方向を開く道として仏法が説かれた。諸行無常であるということは、グリーンフが迷いや苦しみのままではなく、グリーンフとともに生きる自分にもなれるということである。阿難は、釈尊入滅後、仏典結集によって經典を通して法をたずね続けていく聞法の道を歩んだ。釈尊を失った悲しみとともに。

<sup>1</sup>『ブッダ最後の旅』中村元訳 岩波文庫

六五頁

<sup>2</sup>同 一六八頁

## 研修報告

## 研究生第15期生始動

2025年7月より、教化センター研究生第15期生が始動した。教区内の僧侶・寺院関係者および門徒からなる全13名が、講師やスタッフとともに3年間学んでいくことになる。今回は研究生第15期生にかけられた願いと、今年度のカリキュラムを紹介する。

## 第15期生の学び

研究生制度は、研究生が主体的に学ぶことを目指している。しかし、それは決して一人だけで学ぶことを意味するのではない。お互いの意見を尊重し合い、自らの姿を問い直すことによって、研究生一人ひとりの学びとなっていくことが望まれているのである。第15期生に応募動機をたずねたところ、現在の寺院を取り巻く状況に危機感を覚えていることが伝わってきた。この問題意識を大切に「どこに視座を置き、何を目標にすべきか」という課題に向き合い、これからの教区や寺院のあり方、そして自分は何ができるのかをともに考える学びにしていきたい。その学びの中で自らの歩みを見出すことを通して、お寺や教区で活躍する「人」の誕生が願われている。

## カリキュラム紹介

僧俗ともに聞法し、教化センターや教化委員会、別院の活動に触れていく。

| テーマ<br>(学習会名) | 『聖典』に学ぶ   |
|---------------|---|
| 内容            | 講師の課題と研究生の疑問を『真宗聖典』に立ち返って尋ねる<br>今年度は特に「和讃」をテーマに講義を聴講し、座談を行う |
| 担当講師          | 市野 智行 氏 (同朋大学准教授)<br>小川 正幸 氏 (第22組 磔朋寺住職)                   |

| テーマ<br>(学習会名) | 教化センターの研究課題に学ぶ                                  |
|---------------|---|
| 内容            | ・大谷派の近現代史「平和展」<br>・尾張の真宗史<br>・現代社会と真宗教化「グリーンケア」 |
| 担当講師          | センター業務嘱託 (研究)                                   |

| テーマ<br>(学習会名) | 公開講座 聴講  |
|---------------|--|
| 内容            | 教区、センター主催連続講座の第1回を聴講する<br>※第2回以降は自主参加  |
| 担当講師          | ・「解放運動推進要員研修」(第1回)<br>上杉 聡 氏 (じんげん SCHOLA 共同代表)<br>・「聖典研修」(第1回)<br>鶴見 晃 氏 (同朋大学教授) |

| テーマ<br>(学習会名) | 報恩講を勤める  |
|---------------|--|
| 内容            | ・報恩講について学ぶ<br>・お勤めのお稽古<br>・別院の報恩講に参拝 (レポート提出)<br>・教化センターの報恩講とともに厳修 |
| 担当講師          | ・報恩講について<br>樺山 正樹 氏 (第9組 教西寺住職)                                    |

| テーマ<br>(学習会名) | 実践研修   |
|---------------|--|
| 内容            | ・ファシリテーター研修<br>座談会、対話の大切さを知る研修<br>・フィールドワーク<br>研究生、スタッフで相談しながら内容検討 |

| テーマ<br>(学習会名) | 本山で学ぶ   |
|---------------|---|
| 内容            | ・真宗本廟奉仕団「私にとって真宗本廟とは」<br>寝食をともにする宿泊研修 (1泊2日)<br>・事前学習として、宗派について学ぶ |
| 担当講師          | ・宗派について学ぶ<br>蓮谷 健 主幹  |

※学習日程は8面参照

## 【第15期 研究生】

伊藤 瑞樹 (第20組 正賢寺)  
稲垣 大智 (第20組 慈法寺)  
稲垣 元彬 (第32組 西蓮寺)  
加賀 寺顕 (第7組 徳善寺)  
佐藤 芳美 (第26組 正林寺門徒)  
田中 田実 (第2組 田中寺)  
富永 斉 (第18組 養念寺)  
中野 了 (第11組 玉泉寺)  
成瀬 佐恵子 (第30組 泉称寺)  
英 貴志 (第2組 東光寺)  
舟木 誠 (第30組 一心寺門徒)  
森 一 (第20組 善行寺)  
山内 崇 (第3組 淨休寺)  
(50音順)



学習会の様子



講義の内容をもとに  
座談を行う

## 仏教図書館だより

佐藤芳美氏 (第15期研究生／参議会議員：写真左側) より、このたび東本願寺出版より発刊された『坂東本 教行信証』(カラー影印縮刷本) を寄贈いただきました。原則として貸出はしませんが、いつでも教化センターで閲覧できますので、親鸞聖人の肉筆に触れ、思索の過程を感じていただきたいと思います。



## 図書整理

2026年1月8日 (木) ～28日 (水)  
期間中は図書・視聴覚教材の貸出は行いません。



## 研究業務報告 (2025年6月～11月)

## ①大谷派の近現代史

- ◆「あいち・平和のための戦争展」に出席  
同実行委員会主催  
8月14日～8月17日
- ◆平和展学習会 実施  
6月3日・6月30日・7月25日・8月8日・8月27日・  
9月16日・10月9日・10月22日・11月5日・11月20日

## ②尾張の真宗史

- ◆「真宗の葬儀」研究・学習班 学習会 実施  
8月6日・9月19日・10月15日・11月18日
- ◆フィールドワーク  
11月14日  
伝統的な火葬場である「サンマイ」跡の調査をするため、第11組問源寺へ伺った。  
次号以降に報告予定
- ◆御消息を読む会  
歴代門首の御消息などを解説する定期学習会です。参加希望の方はご連絡ください



## ③現代社会と真宗教化

- ◆グリーフケア研究・学習班 学習会 実施  
6月16日・8月27日・9月17日・10月22日・11月12日
- ◆学習テキスト『御同朋を生きる』を通して、当センター関係者による「是旃陀羅」問題の学習 実施  
6月25日・7月24日・8月5日・9月12日・10月14日・  
11月26日
- ◆特別講座「釈尊の教説に見られる業をめぐる言説」  
開講（6月13日／教務所1階 議事堂／約40名聴講）  
講師：箕浦 暁雄氏（大谷大学教授）
- ★2、3面に講義抄録を掲載

## ④真宗の仏事

- ◆真宗の仏事 研究・学習班 学習会 実施  
6月10日・7月10日・8月29日・10月1日・11月4日

⑤『教化センター研究報告』第14集 発行  
(6月28日)

- ◆第1部〈研究報告〉  
尾張の真宗 法宝資料調査報告（その2） 小島 智  
グリーフケアと真宗教化 吉田 暁正
- ◆第2部〈講義録〉  
2021年度 名古屋教区「聖典研修」  
「南無阿弥陀仏～六つの視座から考える～」  
福田 琢・織田 顕祐・鶴見 晃・  
蒲池 勢至・市野 智行・安藤 弥  
※東別院公式HP「お東ネット」でも公開  
しています



《雑感》所属寺院にて「地域のつながり」をテーマとした行事を開催した。地域福祉のためには「ゆるいつながり」の形成が必須であると考え。つながりと言われると鬱陶しいと感じるかもしれないが、「一人でいてもよい」と思える場を獲得することつながりの一つの形であると思う。その一方で、人や場とつながりということは、誰かを傷つけ、自らが傷つく可能性を常に伴う。当センターもつながりを生み出す役割を担いつつ、そこから生じる痛みや孤独を抱える人々とともに歩む場となることを目指したい。(た)

## ■教化センター

〈開館〉月～金 10:00～21:00  
〈貸出〉書籍2週間 視聴覚1週間



教化センターSNS

■名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ

【お東ネット】<https://www.ohigashi.net>  

■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。

## 研修業務報告 (2025年6月～11月)

## ①聖典研修

講師：鶴見 晃氏（同朋大学教授）  
第1回 10月10日 約90名聴講

## ②研究生

- ◆開講式  
7月2日
- ◆『聖典』に学ぶ  
講師：市野 智行氏（同朋大学教授）  
8月22日・9月26日・11月13日  
講師：小川 正幸氏（第22組 磔朋寺住職）  
7月30日・10月30日
- ◆センター研究業務に学ぶ  
講師：小島 智氏（業務嘱託〔研究〕） 7月14日
- ◆公開講座聴講 ※講師は7面参照  
・聖典研修〈第1回〉 10月10日  
・教区解放要員研修〈第1回〉 11月11日

## ◎慶讃法要へ向けて

2028年4月に厳修される教区・別院慶讃法要に向けた準備委員会において、当センターは教化部会を担当する。慶讃法要の教化を企画することを通して「教化の広場（サロン）」づくりに取り組んでいく。

## ・教化部会会議

9月12日（事務会議）、10月21日、11月21日

## INFORMATION

## ◆公開講座

- ・聖典研修「『観無量寿経』の教え「観経和讃」を通して」  
講師：鶴見 晃氏（同朋大学教授）  
時間：午後6時～8時  
会場：教務所1階 議事堂  
期日：（全5回）  
第2回 2025年12月9日（火）  
第3回 2026年2月24日（火）  
第4回 4月7日（火）  
第5回 6月2日（火）



第1回の様子（10月10日）

- ・グリーフケア公開学習会「グリーフケアの基礎について（仮）」  
講師：未定  
期日：2026年2月18日（水）  
時間：午後3時～5時  
会場：教務所1階 議事堂
- ・真宗の葬儀公開学習会「なぜ葬儀・法事を勤めるのか（仮）」  
講師：海 法龍氏（真宗大谷派 長願寺住職）  
期日：2026年3月27日（金）  
時間：午後3時30分～5時30分  
会場：教務所1階 議事堂
- ・平和展特別学習会  
2026年3月頃開催予定

## ◆第37回 平和展 2026年3月17日（火）～23日（月）

「真宗大谷派の海外侵出－華中開教－」  
平和展は過去の侵略加担の事実を見つめ、「兵隊も武器も必要ない」と説かれた釈尊の教えに生きる私たちのあり方を、あらためて問うことを目的とした展示会です。今年度は7年にわたるシリーズ「真宗大谷派の海外侵出」の最終回として「華中開教」をテーマに開催します。